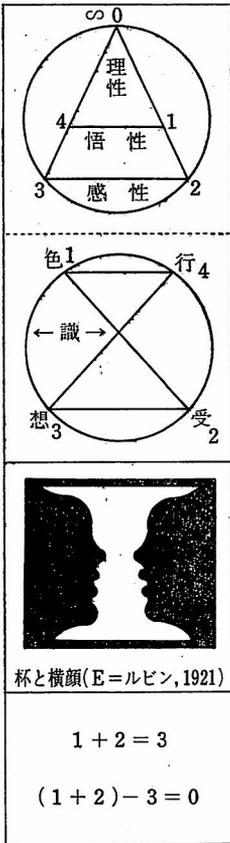


# 般若の空と零ゼロの発見

松尾 宝作

I  
II  
III  
IV

私は第九回佐渡学会において、二つの参考資料を提示して、これに添って私の発表を行った。その第一の資料は、私の主張である「心源の次元的構造」を、西洋と東洋に分けて示し、更に同様のことを、幾何学的図式と、方程式とで示したものであった。本論文においては、これを第一章として、その構造を簡単に説明し、



何が故に比較思想に方法論として心源の自覚が必要であるかを説明し、第二章に於てはこの必要性を実証するため、東西哲学に関する手近かな論文の二、三の例をあげて、この方法を自覚することによって、東西の哲学論文が、一様の基準を以て解釈されることとなり、東西哲学の相異なる焦点は、般若の空の自覚と、その直観的無意識との差であって、しかも心源の構造においては、般若の空と数学の零ゼロとは、全く同一の構造をもち、科学的真理と、哲学的真理は別なものではなく、従って科学的真理と哲学的真理は、同一の歩調を以て進歩し得られるものであることが実証できる訳である。

## 第一章 心源の自覚

右の図式は私が既に発表した私の著書、『比較哲学方法論の研究<sup>〔1〕</sup>』及び『一の論理<sup>〔2〕</sup>』において、既にくりかえし説明したものであるから、いまは紙数の都合上、その詳細な説明は、これを省略することにす。しかし簡単にこの大要を示すと、

I カントの感性・悟性・理性という精神分析を、次元的構造として示したもの

II 仏教の精神分析の基本である五蘊皆空を同じく次元的構造として割りあてたもの

III 心理学において、ルビンの図式といわれているもので、一種の錯覚と考えられているものであるが、これを認識論的に見れば、すべての形あるものの認識が、この通り、有即無、無即有なのであって、無がなければ有が認識できないことを示す幾何学的原理である。

IV 見た通り、数学方程式の最も基本的な形であって、直観とその反省を示すものであり（一心・二門・三観）零が<sup>ど</sup>つねに限界として自覚されていなければ、一切の方程式は成立しない。

以上が私の主張する「比較哲学方法論の図式」であり、これを言葉で説明すれば、「心源の自覚と、その直観的無意識」ということであり、そうしてこの四つの図式は、心源の構造から見れば、

すべて一つの構造に帰着するのであり、その直観的無意識というのは、その総合判断すなわち、哲学に於ては般若の空のところ、科学的に言えば数学の零のところに起るのである。

次に私の比較哲学についての考え方、並びに主張について簡単に项目的に述べたいと考える。

一、真理は一つしかない

ヨーロッパ人と東洋人と数学の答えが異なるであろうか。また幾何学の答えが異なるであろうか。それなのに、その同じ頭で考える思想や哲学がなぜ一致しないのであろうか。ここに比較思想の大きな根本問題があるのである。そうしてこのこと自体、哲学はまだ学としては完成していないものであることを物語っていると言わなくてはならない。同じ頭で考えた科学的心理は、万人共通なのに、哲学的な真理が、幾つもあるということは、哲学には真理が、いくつもあるとは考えられないから、それは哲学的真理が、まだ把握されていないか、或いは真理でないものが、それに混在しているとした考えられないのである。そこに比較哲学の必要があり、方法論が必要になるのである。真理は一つであってこそ、真理であるので、どちらでもよいという真理はあり得ないのである。

二、方法論のない学問はない

現在の比較哲学には確実な方法論がないと言っても差しつかえないであろう。単に比較思想に確実な方法論がないのみでなく、

一般の思想や哲学といわれるものにも一定の方法論のないままに、単なる權威主義を、ふり廻しながら、甲論乙駁を繰り返していると言つてもいいのではなからうか。そうしてついに、その權威を国外に求め、翻訳することが即哲学者であると考えられるようになりつつあるのである。翻訳は必要がないとは言つてもいいが、翻訳することは、語学者のやることで、翻訳即哲学ではないのである。翻訳には翻訳の方法論は勿論あるが、哲学の方法論は何もないのである。特に戦後はこの傾向が激しいので、自己を見失つた翻訳哲学が權威ある哲学であり、哲学者であると考えられているから、日本の中にも西洋思想が、はびこつて、比較思想は益々困難になるのではなからうか。数学を学ぶということは、数学の方法を学ぶことであり、医学を学ぶということは、医学の方法を学ぶことである。このような論法に立てば、今日の哲学と一体何なのであろうか。そうして眞の比較哲学方法論がなくて、比較哲学は成立するであらうか。われわれは、ここで数十年前から開かれたハワイの東西哲学者會議を反省せざるを得ないのである。それはムーフ教授の異常な熱意と努力にもかかわらず、またそこに集つた東西哲学者の優れた顔ぶれにもかかわらず、遂に見るべき成果は得られなかつたのである。私はこれはやはり方法論の欠如の爲でなかつたかと考へるのである。それで私は新しい日本の比較思想学会は、再びこのハワイ学会の轍を踏んではならないと思つたので、この学会の出發以來、方法論の研究に専念して

いるものである。

### 三、比較と對比

比較思想で現在最も問題になつてゐることは、「比較と對比」ということであるが、私の考えを率直に一言で言えば、比較には確實な方法論がなくてはならないが、単に東洋の思想と西洋の思想とを比較すれば、それは對比にならざるを得ないと思つるのである。何故ならば、東洋の論理と西洋の論理は、根本的に異なるからである。西洋の論理は形式論理を唯一の指針として、その形式論理による合理性のみを追及するものであるが、東洋の論理は因・縁・果の弁証法的論理であり、それは、起信論に到つて明らかになつてゐるように、心源の自覺に起因するものであるから、幾何学の図形的認識にも適應し、数学の方程式認識にも対応しうるのである。従つて、東洋の論理（弁証法的論理）と西洋の形式論理とを比較する場合は、この両方の論理の根底にまでさかのぼつた、心源の自覺にまで到らないと、東・西共通の尺度が得られないのである。即ちものを比較するとき、そこに共通の尺度を持つということが必要なのであつて、その共通の尺度を持たないで、比較すれば、それは方法論を持たない比較思想であり、それは単なる對比に終らざるを得ないのである。故に比較哲学乃至比較思想を「学」として遂行するためには、まず自己を自覺することが必要であり、それは方法論としては、心源の図式を完成することである。

私が比較思想方法論として、心源の自覚を主張する根本の理由は、ここにあるのである。そうして心源の構造などというものは、見えないものであるから、これに直観智が働くように図式化する必要があるのである。それは、図式のない幾何学は解けないと同じだからである。故に私は今ここに示した図式が、絶対不変の真理であると主張するつもりはないが、しかし比較哲学探求の方法としては、この方向に研究を進めて、より完全なものに向って進むべきことは確実であると思うのである。

## 第二章 自燈明・法燈明

この章においては、われわれが普段手ぢかに読んでいる哲学書(3)の中から、二、三の部分を抜粋して、われわれが比較思想を行う場合、如何に、その解釈ないし、いろいろの難問の解決に当り、われわれが「方法論」をもつことが大切であるかを実証しようとして試みたものである。

### 一、弁証法にも真諦と俗諦

龍樹は縁起を八不によって説明し、空不可得の真理を明らかにした。そして彼はこの真実を空性といい、勝義諦という。そして彼は縁起の道理によって表される存在（縁生法）を世俗諦という。したがって、空性がわれわれの能所の認識を超越した無相の真実であるに對し、世俗諦はわれわれの能所の認識において把握される有相の真実である。……「勝義諦は

縁起の一切法自性空というのみ。しかし私は縁起の世間的実用という立場から一切法を施設した」（空七十論）のであって……龍樹は中論の中で次の如くいっている。「縁起なるもの、われはこれを空性という。かの縁起は仮設であり、それはまた中道である。」

中村元氏外編集 現代仏教講座 第二卷 一三頁

この短文は山口益博士の「大乘としての般若空觀説」の講義の一部であるが、われわれがもし、心源の自覚が、哲学にも、幾何学的認識にも、数学の方程式論理にも共通の次元的構造をもっているという自覚を既に（第一章の説明の如く）もっているとするば、ここに提示したこの小論文の内容が、如何に第一章IVの数学方程式の構造によく一致するかを、ただちに発見しうるであろう。龍樹の中論のこの解説は、見方によっては一種の数理哲学とも見られるものである。そして「直如||次元」と考えなければ、八不中道や三諦の偏などの説明はなかなか説明がつかないであろう。不生・不滅というのは何が不生・不滅なのか、これは仏教哲学でも大きな疑問であり、解説もまちまちである。しかし、心源の構造が、次元的であり、真如法性と解すれば、容易に解釈しうることである。

そして彼は縁起の道理によって表される存在（縁生法） 1 + 2 || 3 ……で、反一合を世俗諦という。したがって、空性がわれわれの能所の認識を超越した無相の真実であるに對し（1 + 2） |

3 || 0 ……世俗諦(正・反・合の弁証法)は、われわれの能所の認識において把握される有相の真実である。……勝義諦は縁起の一切法自性空というのみ……この意味は言説では大変わかりにくい論理であるが、方程式として(一心・二門・三観)の心源の働きから考えれば、極めて当然のことである。われわれは普通ヘーゲルやマルクスの正・反・合の形式をもって安易に弁証法と称しているが、仏教の弁証法は、誰にでも真理であると肯定される数学的論理をも既に含むものであり、(自然数の数詞は量に限定された一種の言語であり、方程式は人間が考えるときに心源の働きを、そのまま示すものと考えられる。)この点西洋哲学の弁証法と、仏教哲学の弁証法には大きな相違があることを知らなくてはならない。故にインドではインド数学発見のかなり以前から、般若空の発見があり、人間の心の働きが深く研究されていたものと考えられる。ここで考えられることは、インドの論理学には譬喩量というものがあることである。われわれが、いま仏教弁証法を方程式を例にとつて考えることも、一種の喩と見てもいいのではないか。そして方程式は量に限定された特種の数詞を使って、心源の働きをよく表出するが、普通の形式論理を使って行う幾何学は、直観知の働く図式がなければ解けないのではなからうか。それは形式論理の不完全さを示すものであり、方程式論理がよく心源の働きを表出することとの相違点ではないかと考えられる。従つて比較哲学方法論には、心源の図式が必要なのである。

## 二、西洋哲学には総合判断がない

ヤスパースはいう。哲学は *Was ist?* と問いをもつて始まっている。……この問いに対して数千年の間に驚くほど多くの答が与へられた。唯物論・唯心論・物語論とか呼んでいる。しかしそれらの中のどの一つも、それが真実であることの証明されたものの無いのは、これらの見地がどれもみな存在 *Das sein* を私に対象として捉へているからである……われわれの思惟する現存在の、このような状態を、主観客観の分裂 *Subject-Object Spaltung* とする。(Einführung in die Philosophie) しかし存在は全体としては主観であることも客観であることもできないのであつて、むしろ包越者でなければならぬのであると。

前掲書一七五頁 上田義文氏論文

ここで参考として引用したヤスパースの論文は、西洋の哲学者が西洋哲学をどのように見ているかを、彼ら自らに語ってもらつたことになる。この論文を三段に区切つたのは、西洋の論理を形式論理とし、東洋の論理を弁証法論理として仮定し、それは前記の理由から一心・二門・三観を、一つの連続とした方程式論理即ち弁証法論理と見た場合、この段でこの三つの点が、比較哲学の問題点であると考えられる。

1 何が故に西洋哲学に「主観・客観の分裂」が起るか?

2 一切の疑いに答えることが哲学であるとするれば、*Was ist*

sein? ではなく、Was ist das? と考えるべきでないか。即ち方程式の未知数Xを解くことではないか。ここに同じく「ある」を問題とするのであるが、東洋の「ある」は……である、という認識判断であり、ヤスパースは、ザインという存在判断を問題にしているのである。

3 ヤスパースの超越者を、心源の構造から見れば、般若の空であり、また方程式の零に当る構造を持っているはずであるが、この矛盾的自己同一である般若の空を自覚していないところに、超越者もまた主観・客観の分裂を起しているのであって、私が西洋哲学には、零の発見がないと主張する根本の理由である。

西洋の哲学に総合判断がないということは、カントも既に言っていることであり、カントの第一批判の主たるテーマでもある。即ち

1 如何にして総合判断は可能であるか

2 認識論的主観主義

の二つであるが、西洋哲学には遂に彼等の希望する総合判断は今日に到るまで解決されていないのである。

その主な理由は、方法論の問題である。彼等は、ギリシヤ以来の形式論理を金科玉条の真理と考えて、それ以上に人間そのものの本質にまで逆上って研究するということが、今までかつて無かったからである。汝自身を知れ、ということとは単なる口頭禪に終止したのであって、その心源を探求するというのがなかったの

である。そのことを証明するために、ここに示した参考文献一と二を、よく比較して見ることが大切であると考えられる。

即ち一の東洋論理は、心源の自覚を根本とするものであり、中論の般若の論理は、方程式論理と共通のものがあるのである。

しかし、西洋の形式論理は、演繹法といわれるもので、帰納法のない論理であり、従って総合判断の不可能なことは当然のことなのである。このことを実証する為には、カントの第一批判の主たるテーマ

1 如何にして総合判断が可能か

2 認識論的主観主義

の二つに対して、直接われわれの主張である「心源の自覚とその直観的無意識」を適用して見ることである。長々と第一批判の論義を重ねなくとも一瞬のうちに解決される問題である。ヤスパースの超越の問題が、神と実存とに分裂することも、般若の空と零の発見が、心源の自覚に於ては、全く同様の構造を持つものであるという哲学の根本としての方法論をもっていないことが原因と考えられる。

重ねて注意するが、西洋の哲学は論理主義であり、東洋の論理は、人間の自覚を基本とする、心源の自覚に基因する弁証法論理なのであって、その最も大きな差は、空を自覚するか、それが出来ないかの点に最もよく表れるということである。

三、仏教の唯識無境について（認識と存在の問題点）

陳那の観所縁論第七偈は、次のように述べている。識は対象の形相を具して現れるから、この点によって、識は所取の相として成立する。またその形相を因として識は、能取の行相に於て生起する。そして識が対象として顕現して、所取態となったということが、一つの習気となり、それが更にまた、その識が所取態となって顕現するための功能（種子）として存し、この因果の展転性は無始時來性である。これがいわゆる識転変説であり、ただ識という事態において、能所なる世間の縁起的性格があらわされているから、唯識縁起説である。

前掲書一七頁からの引用

龍樹の体系づけた中観学説は、仏陀の説かれた縁起説に対して正しい哲学的な見方を示し、縁起説を真に学としての原理（弁証法）ならしめようとするものであったといえる。しかし縁起の世界を世俗的な仮説として肯定しつつ、そこに勝義空性を示すという龍樹の学説は、方程式も零の発見もない古代に人々の理解をうることは誠に至難の業といわなくてはならない。それは現在に於ても西洋哲学者にすら判っていないことであり、総合判断が欠如していることは判っている。それが非無であり、方程式の零に相当する心源の自覚であるなどということは、今でもわかっていないことを見ても理解せられるであろう。そこで縁起の世界の真俗二諦は表裏一体なのであるから、仮名としての縁起の世界をまず肯定しようとする方便の教学があらわされて来たことも当然のこ

とと考えられる。それは哲学と宗教の関係を考えれば、自然のことと考えられる。解深密教・勝覺經・楞伽經などの、いわゆる中大乘經典がそれであり、四世紀初頭に出来た無著・世親の唯識学説は、これを体系化したものと考えられる。しかし大乘空観の理解を容易ならしめようとして、仮説としてのアラヤ識縁起説を立てて大衆の理解を容易ならしめようとした中期大乘經典も、これを哲学的に説明しようとする唯識縁起説となると、やはり仲々困難でかえって後世の仏教徒に大きな問題をなげかけたようにも考えられる。ここに引用した、能取所取の識転変説にしても、大乘空観と如何ように連関するか、というような問題になると、言説の理論だけでは難かしい問題が続発するのである。しかしこれを心源の図式にまでさかのぼって考えれば、理解が大変らくになるので、唯識縁起説でも、識転変説でも心源の自覚においては全く変わらないので、同じ図式を以て理解できることなのである。それでは比較哲学方法論としては、心源の図式が必要で、それは幾何学の解説に図式が必要なのと同じく、図式のない幾何学が解けないと同様、図式のない哲学は解けないと主張するのである。しかしわれわれは今や、その図式を持っているのであるから、この図式を見れば、識の中には（一心）能取も所取も、主観も、客観も、すべて備っているということは一目で判ることで、仏教そのものが、釈尊の始めから縁起説であり、心源の自覚であり、それが大乘空観にまた唯識縁起説に、更にまたアラヤ識縁起説に、如来蔵

縁起説に、そして真如縁起説に、次第に変化したことが、容易に理解されるのである。

(1) 『比較哲学方法論の研究（心源の研究）』東京書籍

(2) 『一の論理』北樹出版

(3) 中村元外編集「現代仏教講座 第二巻」角川書店

(ま)お・ほうさく、比較哲学・会員